

「現代児童青年精神医学」永井書店 2002

自閉症—学童期および青年期—

小林隆児

図の目次

図 1	情動的コミュニケーションと象徴的コミュニケーション	6
図 2	コミュニケーションの広がりコミュニケーション水準	7
図 3	トップ・ダウン的発想	9
図 4	ボトム・アップ的発想	9
図 5	接近・回避動因的葛藤の悪循環 (Richer, 1993)	11

1. はじめに	4
---------------	---

2. 学童期における言語認知発達の問題	4
---------------------------	---

1) 言語認知機能はどのようにして獲得されていくか	4
a. 環境世界と認識のあり方	4
b. 知覚と認知 (認識)	4
c. 対象と属性	5
2) 自閉症児の知覚世界とことば文化	5
a. 対象のもつ属性と知覚刺激	5
b. ことば文化と環境世界	5
c. 注意や関心を分かち合うこと	5
3) 愛着形成と言語認知機能	6
a. 情動と認知	6
b. 愛着と知覚	6
a) 安全感と知覚	6
c. 自閉症と母子コミュニケーション	7
a) 自閉症と無様式知覚	7
b) 無様式知覚と母親参照	7
c) コミュニケーションの広がりコミュニケーション水準	7

4)	従来の言語認知障害仮説に対する疑問.....	7
a.	言語認知面の評価方法に孕む問題.....	7
b.	象徴化、抽象化.....	8
c.	個体能力障害という考え方.....	8
5)	ことばの意味は文脈によって規定される.....	8
a.	対象と着目する属性.....	8
b.	象徴機能と着目する属性.....	8
c.	対象の持つ意味を規定する文脈.....	9
d.	トップ・ダウン的発想からボトム・アップ的発想へ.....	9
3.	青年期における行動上の問題.....	9
1)	自閉症児にみられる行動の特徴.....	9
2)	行動について考える.....	10
a.	行動のもつ意味は客観的なものか.....	10
b.	当事者の行動と動因.....	10
c.	二者間コミュニケーションと間主観性.....	10
d.	コミュニケーションの構造からみた行動.....	10
3)	自閉症児の行動を考える.....	10
a.	なぜ彼らの行動はわかりにくいのか.....	10
b.	動因的葛藤と衝動性.....	10
4)	行動障害の背景にあるもの.....	11
a.	異常に強い警戒心.....	11
b.	安全感（安心感）のなさと独特な知覚の仕方.....	11
c.	潜在的に内在する強い愛着欲求.....	11
d.	接近・回避動因的葛藤と強迫性.....	11
4.	関係障害臨床からの接近.....	12
1)	動因的葛藤の悪循環と関係障害.....	12
2)	自閉症児が本来のことばを獲得するために.....	12
a.	接近・回避動因的葛藤の悪循環への介入.....	12
b.	愛着関係を深め、子どもの情動を穏やかにする.....	12

c. 情動と身体が共鳴し合う	12
d. 子どもの意図を治療者は投げ返す	12
3) 行動障害に対する治療的介入	13
a. 接近・回避動因的葛藤の悪循環に対する介入.....	13
b. 衝動性・攻撃性の緩和.....	13
c. 行動から身振りへ	13
5. おわりに	13
6. 文 献.....	14

1. はじめに

自閉症の臨床は、彼らのハンディキャップが生涯にわたって残存していくため、様々な角度から地道に継続されなくてはならない。ここでは彼らの学童期および青年期の主要な課題である言語認知面の問題（小林, 執筆中）と行動障害（小林, 2001）に焦点を当てながら、自閉症の臨床課題を論じる。

2. 学童期における言語認知発達の問題

1) 言語認知機能はどのようにして獲得されていくか

a. 環境世界と認識のあり方

われわれは自分の周囲の世界（環境世界）を捉える際に、暗黙のうちにある枠組みをもって環境世界を切り分けている。認知ないし認識といわれる精神機能はまさにそのことを意味している。環境世界において不断に生起する事象や、無限に存在する対象を前にして、それらをただ漫然と知覚し、認知しているわけではけっしてない。事象や対象にわれわれが関わるあり方によって、その捉え方は規定され、環境世界は意味あるものとして秩序化される。このような環境世界の捉え方こそ、まさに文化そのものということさえできる。人間は生誕後から生涯を通して、このような精神的営みを続けていく。育児は、養育者が中心となって子どもにこのような文化を伝承するという営みを意味している。したがって、言語認知機能の獲得のためには、子どもと養育者の深くて濃密な関係が必然的に求められる。

しかし、自閉性障害を有する子どもたち（以後、自閉症児と称する）は、生誕直後からこのような望ましい養育者との関係が成立しない。ここに自閉症児臨床の問題の多様さと困難さの起源がある。

b. 知覚と認知（認識）

物事や事象の文化的意味を認知（認識）するということはどのような営みによって成立しているか、認知と密接な繋がりを持つ知覚との関係において考えてみよう。

子どもたちがある対象や事象を前にした時、それを知覚し、どのように認知するのか、その認知のあり方を考えてみると、このように認知するのが絶対的に正しいということはいえない。物事の認知のあり方は恣意的側面を有する。子どもの内的世界の豊かさは、眼前の対象を変幻自在に操っているともいえるほどである。

c. 対象と属性

本来、対象は多様な属性を有している。形、大きさ、色、触感、質感、模様、用途など、様々な特徴や性質が備わっている。その多様な属性の何にどのように着目するかによって、その対象の持つ意味は異なってくる。対象や事象はそのおかれた文脈 context によって意味するものが変わる。文脈によってその意味が規定されるのである。物事の認知のあり方は恣意的なものであると述べた根拠はここにある。

物にはそれぞれ意味するものとしてのことばが付されていることを容易には認識できない自閉症児に、そのことを教える際に、このことは非常に重要な意味を持つ。子どもが対象のどのような属性に着目しているか、そのことをわれわれが感知せず、子どもにとって「いま、ここで」その対象が持つ意味を適切に教えることはできない。

2) 自閉症児の知覚世界とことば文化

a. 対象のもつ属性と知覚刺激

自閉症児にとって外界からの刺激が無秩序に、無差別に、浴びせられるように飛び込んでくるのが彼らの自伝から明らかになった (Williams, 1992)。もしも彼らがそのような世界に身を晒されているとするならば、なんらかの形で自分の身を守る手だてが必要になってくる。自閉症児が対象や事象に対してある一定の決まったスタイルでもって関わろうとする (同一性保持、強迫的こだわりなど) のは、おそらく彼らのこのような知覚世界と密接に関係しているだろう。

b. ことば文化と環境世界

われわれの体得してきたことば文化は、生誕直後には無秩序であったと思われる知覚刺激の世界を、切り分けて秩序化するという働きを有する。環境世界をことば文化でもって秩序化できない自閉症児の言語認知面の障害は、人間が他者とともに生きていく上で根源的ともいえるほどの深刻な意味を孕んでいる。

c. 注意や関心を分かち合うこと

自閉症児の知覚世界が秩序化されていくためには、彼らが対象や事象のどのような属性に着目しているか、そのことをわれわれも共有し、それに沿った働きかけをすることが不可欠になる。

しかし、彼らがある対象のどのような属性に着目しているかを感知することはわれわれにとってもさほど容易な作業ではない。その対象とどのように関わっているか、彼らはわれわれにことばで教えてくれるわけではない。われわれは彼らがその対象とどのように関

わり、心が惹きつけられているかを感じ取るしかない。感じ取ることは、頭で考えて分かることとはまったく異なった次元の精神の営みである。

3) 愛着形成と言語認知機能

a. 情動と認知

われわれはこれまで認知や学習は感性的ないし情動に頼らずに営まれる精神機能であると考えてきたきらいがあるが、人間の理性にとって情動（感性）はけっしてその営みを妨げるようなものではなく、理性をその背後から支えているという、重要な役割を担っている（Damasio, 1994）。

情動は人と人の中で響き合うという関係、すなわち情動的コミュニケーションの成立を可能にしているが、それが基盤となって、象徴的コミュニケーションが形成されていく。それなくして望ましいコミュニケーションは成立しがたい（図1）（鯨岡, 1997）。われわれが子どもにことば文化を伝承するためには、そのような望ましいコミュニケーションの成立が不可欠になる。情動的コミュニケーションの果たす役割に注目する必然性がここにある。

先に述べた知覚と認知との関係を考える上で、決定的ともいえるほどに重要なことは、知覚そのものが情動と深くつながって相互に機能し合っていることである。

図1 情動的コミュニケーションと象徴的コミュニケーション

b. 愛着と知覚

a) 安全感と知覚

愛着形成により、子どもと親の間には安全感が育まれていく。この安全感の有無が子どもの知覚のあり方に決定的ともいえる影響を及ぼす。

安全感の乏しい状態にある自閉症児では自己感が萎縮して、不安に圧倒された状態にある。そのため、あらゆる外界刺激は彼らにとっては脅威的に映る。健康な子どもや治療によって安全感が育まれていった自閉症児であれば、自己感は膨張し、外界の刺激は好奇心がそそられるほどに快適なものに映っていく。安全感の有無が知覚の有り様を劇的に変容させる。「知覚変容現象」が起こるゆえんである（小林, 1999）。

c. 自閉症と母子コミュニケーション

a) 自閉症と無様式知覚

知覚変容現象をもたらす大きな要因として、自閉症にみられる独特な知覚様態としての無様式知覚の存在がある。無様式知覚とは、あらゆる刺激のもつ動きの変化を敏感に察知し、相貌的に感じ取るという特徴を持つ。ここで重要なことは、このような知覚体験においては、必ず快か不快、おもしろい、恐ろしいなどといった情動がゆさぶられるという体験を同時に併せ持つことである。

b) 無様式知覚と母親参照

子どもは心細くなった時に母親の存在を手がかりにして（母親参照機能）、心の安定を得ているが、それは無様式知覚という独特な知覚様態によって初めて可能になる。母親の醸し出す力動感に感応し、安全か否かを判断することが可能になり、子どもにとっての環境世界の意味が次第に体得されていく。このような母子コミュニケーションの世界における知覚は、独特な未分化ないし原始的な段階にある。

c) コミュニケーションの広がりコミュニケーション水準

人間は発達するにつれ、特定二者間から次第に不特定多数間でもコミュニケーションを営むことが可能になっていく。その際、コミュニケーション水準と知覚機能はどのような関係にあるかを考えてみよう（図2）。コミュニケーションの初期段階としての特定二者関係では、より情動水準に依存しているため、図2では左下の方に位置し、無様式知覚という未分化な知覚機能が主に働いている。その反対に、コミュニケーションの相手が不特定多数の広がりを示すと、コミュニケーション水準は象徴性が高まり、知覚機能も高度に分化し、主として視聴覚機能が働くようになる。このようにコミュニケーションの広がり、コミュニケーション水準ならびに知覚機能の分化は密接に関連し合っている（小林, 印刷中）。

図2 コミュニケーションの広がりコミュニケーション水準

4) 従来の言語認知障害仮説に対する疑問

a. 言語認知面の評価方法に孕む問題

言語認知面の発達評価の際に、われわれが使用する評価法には多くの手法が開発されているが、それらにはすべて共通した特徴がある。ある対象や事象を子どもに呈示し、その認識のあり方を問う。答える手段が口頭であるか否かを問わず、基本的にはこのような考

え方に基づいている。その際、子どもに呈示される検査道具には、なんらかのことばや描画などが示されている。それらはけっして実際の対象そのものをありのままに忠実に示しているわけではない。その対象のもつなんらかの属性（特性）に着目し、それを取り上げ浮かび上がらせている。ある事象や出来事を示す際にはより一層そのことが明らかである。このような対象や事象をことばや描画によって提示する作業は、象徴化ないし抽象化と称され、極めて人間的な営みである。

b. 象徴化、抽象化

ここで最も問題となるのは、象徴化や抽象化によって提示する作業によって、その対象や事象はある一定の枠組みによって切り分けられていることである。つまりここですでにその対象や事象のもつ意味が特定化されることになる。このような作業は人間にとってあまりにも自明なことであるがために、日頃ことさらその意義を問わないが、自閉症臨床においてはまさにここにこそ核心的な問題が潜んでいる。

c. 個体能力障害という考え方

種々の発達検査が開発される基盤となった発想には、当然子どもが発達途上の（つまりは未完成の、未熟な）存在であって、大人という完態に向けて成長するものであるという大前提がある。大人の見方、考え方を基本にして、それからどの程度どのように遅れているか、歪んでいるか、という尺度でもって評価することになる。個体能力障害という考え方が深く染み込んだ発想である。

5) ことばの意味は文脈によって規定される

a. 対象と着目する属性

子どもの着眼点、つまりはその対象を前にした際に子どもがそれに対してどのように関わっているか、その対象のどのような属性に心を奪われているか、どのような側面に好奇心を向けているか、つまり動機づけ（動因）の質そのものが対象の認識のあり方と切実に関係している。

b. 象徴機能と着目する属性

自閉症の子どもたちが共通に抱えていることばにまつわる混乱は、これまで述べてきたことと深く関連している。私たちが用いていることばを彼らも懸命になって覚えようとしているが、そのことばのもつ象徴性（象徴機能）をわれわれと共有できないところに問題の核心がある。象徴機能とは、その対象のもつ属性の中のどのような側面に着目するか、それを相互に体験的に共有していることを意味している。ことばがコミュニケーションの

媒体としての働きをもつのは、まさにそのことによっている。

c. 対象の持つ意味を規定する文脈

ある対象が実際に、「いま、ここで」どのような意味を孕んでいるかを決定づけるのは、まさにその文脈にかかっている。ここでいう文脈とは、単に状況とか場面の意味ではなく、その場の当事者の内的世界も含め、その場を規定するあらゆる条件を含めたものである。その意味で、文脈は一刻一刻、常に変化し続けている。そのように考えていくと、ある対象のもつ意味、つまりはその認識のあり方は、一義的どころか、無数とっていいほどに多義的である。その多義性の中で、どこに焦点を当てて、認識のあり方を決定づけるか、そこではわれわれの関わり方そのものが決定的に重要な役割を果たしている。

d. トップ・ダウン的発想からボトム・アップ的発想へ

われわれの物の見方を普遍的、絶対的なものとし、それとの比較で誤りや歪みを評価する考え方は、トップ・ダウン発想とでもいうことができる(図3)。われわれ大人の発想のもとに、それを子どもに伝えることが治療ないしは教育であるということになる。

図3 トップ・ダウン的発想

これまで述べてきた筆者の発想は、前者と比較すると、ボトム・アップ的発想ということになる(図4)。「いま、ここで」の文脈の中で、ある対象のもつ意味を子どもに指し示すための前提として、子どもがその対象を前にしてどのように心動かされているのか、どこにどのように好奇心を示しているのか、つまり動因の質的内容をわれわれが分かち合うことが必要になる。ここで初めて、その文脈に相応しいことばを彼らに提示することができる。

図4 ボトム・アップ的発想

3. 青年期における行動上の問題

1) 自閉症児にみられる行動の特徴

これまで述べてきた言語認知機能の問題のみならず、自閉症児の行動上の問題にも深刻なものがある。とりわけ青年期に達すると、青年期特有の問題も重なり、行動問題は極めて由々しき事態を呈してくる。その際だった例が強度行動障害といわれる状態である。

彼らの行動問題の最大の特徴は、状況にふさわしくない、その場に不釣り合いな行動を呈するところにある。このことはけっして行動上の問題のみに限定されているわけではな

く、彼らの用いることばにも同様の特徴を指摘することができる。

2) 行動について考える

a. 行動のもつ意味は客観的なものか

行動の問題を検討する際に、まずもって取り上げなくてはならないことは、行動そのものが客観的な意味をもつかということである。彼らの行動を捉えて、問題点を指摘する際に、彼らの行動をどのように読みとるか、その読みとり方に客観的なものがあるかということである。

b. 当事者の行動と動因

行動は誰から見ても同じような意味を有するという客観的なものではない。行動を捉える際には、われわれにも目に見える形で捉えることができる行動そのものの他に、行動を引き起こす当事者自身の動因（動機）や意図が背景にあることを忘れてはならない。この動因や意図は当事者自身の主観的領域に属する。さらには行動を受け止める相手の存在も、その受け止め方は人によって様々である。受け止め方もその人の主観的領域の問題となる。

c. 二者間コミュニケーションと間主観性

コミュニケーション、とりわけ特定二者間のコミュニケーションにおいては、当事者双方の各々の主観性ととともに、二者間にある思いや情動が共有されるという間主観性（鯨岡，1989）の領域がある。当事者双方の気持ちが通い合うという体験が可能になるのも、このような間主観性が二者間で生じることによるところが大きい。

d. コミュニケーションの構造からみた行動

行動自体がコミュニケーションの当事者間でよく理解されるためには、行動の主体側（当事者）の動因（意図）、受け止める側（その相手）の理解、その行動のもつ通常の意味（常識的な意味、通念、共同主観）という三つの次元の内容が概ね共通していることが大切になる。

3) 自閉症児の行動を考える

a. なぜ彼らの行動はわかりにくいのか

自閉症児の行動がわれわれにわかりにくいには、彼らの行動の動因（意図）をつかみにくいことの他に、行動それ自体のもつ意味が不明確、つまりは未分化で社会性に乏しいことに依っている。

b. 動因的葛藤と衝動性

さらに大きな要因として、彼らは行動を起こす際に、強い動因葛藤がある。愛着をめぐ

る強い葛藤、つまり接近・回避動因的葛藤（Richer, 1993）である。接近・回避動因的葛藤状態に陥りやすい子どもは、強い欲求不満、恐れ、不安感を抱きやすい傾向をもち、彼らは回避欲求が非常に強いために、接近行動を起こしてもいざ親から抱きかかえられそうになると回避行動が誘発され、さらに回避行動を起こして親から放置されると接近行動が誘発されるという悪循環を繰り返す（図5）。そのため両者間に愛着関係が容易には成立しない。このような特徴を持つために、愛着形成が困難になる。

彼らはなんらかの欲求が起こっても、それに対して葛藤的になりやすい。何をしようとしても葛藤的になるがために、衝動性は異常なほどに亢進していく。葛藤的であるがために、彼らが何をしたいのかわれわれには伝わりにくい。ますます衝動性を帯び、行動は攻撃的色彩を帯びていく。子ども自身も行動をコントロールすることは難しく、自分の意志でもって行動することさえできなくなる。

図5 接近・回避動因的葛藤の悪循環（Richer, 1993）

4) 行動障害の背景にあるもの

a. 異常に強い警戒心

自閉症児は愛着形成不全によって安全感が得られず、常に外界に対して異常なほどに強い警戒心を抱いている。もともとの知覚過敏は彼らの警戒心によって、より一層先鋭化していくという悪循環を生む。

b. 安全感（安心感）のなさや独特な知覚の仕方

彼らの安全感のなさは、先に述べたような知覚変容現象にみられるように、外界刺激に対して非常に不快な情動を引き起こされ、外界知覚の多くは迫害的色彩を帯びるようになる。

c. 潜在的に内在する強い愛着欲求

彼らの内面には、動因的葛藤にみられるように、潜在的には養育者に対して強い愛着欲求を抱いている。しかし、彼らの警戒心があまりにも強いがために、両者間の葛藤は一層強まっていく。

d. 接近・回避動因的葛藤と強迫性

接近・回避動因的葛藤が強まることによって、彼らは内面では愛着欲求を抱きながらも、それを行動で示すことに対して強いためらいと抑制を働かせざるをえなくなる。このことが彼らの強迫性の基盤に存在している。

4. 関係障害臨床からの接近

1) 動因的葛藤の悪循環と関係障害

接近・回避動因的葛藤は、生来的な知覚過敏によるところが大きい。さらに彼らの外界に対する異常なほどの強い警戒心により、知覚過敏はますます強まるという悪循環が生じてしまう。もともとは子どもの知覚過敏によってもたらされたものであっても、子どもに関わる側も関係の中に巻き込まれ、結果的に両者間に関係障害が生じる。

2) 自閉症児が本来のことばを獲得するために

a. 接近・回避動因的葛藤の悪循環への介入

治療の基本には接近・回避動因的葛藤の悪循環をいかにして断ち切るかということに尽きる。ただ、この動因的葛藤は、もともとは自閉症児の知覚過敏に源を発しているとはいえ、すでに誕生後の悪循環によって、養育者（治療者、教師など）も一方の当事者として関与することにより、関係障害は両者を巻き込み、複雑な様相を呈してくる（小林・財部, 1998）。

b. 愛着関係を深め、子どもの情動を穏やかにする

動因的葛藤が緩和されると、子どもの中に潜んでいた愛着欲求は顕在化し、盛んに養育者に甘える行動を見せるようになる。このような欲求をしっかりと受け止めることにより、それまで強い葛藤状態によって亢進していた衝動性は急速に和らいでいく。彼らの快適な情動を補強するとともに、不快な情動をしっかりと受け止め、なだめていくという養育者の関わり（情動調整的他者）を通して、子どもの情動は穏やかなものとなり、次第に情動を自ら調整すること（自己調整）も可能になっていく。

c. 情動と身体が共鳴し合う

愛着関係が深まると、必然的に両者間の情動的コミュニケーションは深まり、双方の気持ちや意図、動因などが容易に通底するようになっていく。このような間主観的世界が育まれていくと、双方の身体間でも容易に共鳴し合うような関係になっていく。

d. 子どもの意図を治療者は投げ返す

情動的コミュニケーションが深まってくると、子どもの意図を感知しながら、われわれは子どもと関わるができるようになる。するとわれわれは、子どもと関わり合いながら、暗黙のうちにその場に相応しいことばを思わず発するようになる。子どもの今の気持ちに最も相応しいことばが投げかけられることにより、両者のあいだで映し返し

mirroring が起こる。ことばは本来このようなプロセスを経て体得されていくものである。

3) 行動障害に対する治療的介入

a. 接近・回避動因的葛藤の悪循環に対する介入

先のことばに関する働きかけと基本的には同じ姿勢でもって関わるのが大切になる。ここでも彼らの愛着をめぐる葛藤の緩和が初期の治療介入において最大の課題となる。

葛藤が緩和されていくと、彼らは自分を安心して表出するようになり、彼らの気持ちの変化が手に取るように感じ取れるようになる。ここで重要なポイントは、彼らの行動が表面的には非社会的、反社会的であっても、けっしてわれわれの価値観でもって判断して対処することをしないことである。あるがままに受け止めることが肝要である。そこで彼らの内面の気持ちの動きに沿って、彼らの行動の意図を読みとり、投げ返していく。

b. 衝動性・攻撃性の緩和

そこで臨床上問題となるのは、行動障害においては非常に激しい衝動性や攻撃性を伴うために、容易にはわれわれも彼らの行動を受け止めることができない。身を挺して取り組むには危険を伴う場合さえある。その際、薬物療法は大きな役割を果たす。主として抗精神病薬を用いて彼らの衝動性を緩和しながら、彼らをしっかりと受け止めて、情動興奮を穏やかなものへと変えていくことがわれわれには求められる。

c. 行動から身振りへ

強い葛藤状態のもとでの彼らの行動の多くは、衝動的で攻撃的な色彩を帯びているため、他者には受け止めがたいものとなっている。しかし、潜在化していた彼らの愛着欲求が治療者や養育者に対して表現され、受け止められていくことによって、彼らの行動は甘えを基本とした穏やかなものへと変化していく。このような変化に伴って彼らと治療者の関係は、好ましい愛着関係へと発展していく。情動的コミュニケーションの成立である。そこで初めて、双方のあいだで身体や情動が共鳴し合い、治療者の振る舞いを彼らは取り入れることが可能になっていく。さらにはすでに獲得した社会的行動も円滑に表現されやすくなる。このようにして彼らの（非社会的、反社会的）行動が、身振りとしてコミュニケーション的役割を積極的に果たすことが可能になっていくのである。

5. おわりに

これまで自閉症にみられる特有な言語認知障害像をもとに、障害特性を考慮したアプ

ローチを行うことが当然と考えられてきた。彼らにことばや社会的な振る舞い方（ソーシャル・スキル）を教えるという従来の社会的適応面に焦点を当てた援助は、ある程度の適応力を高める効果はあるとしても、自閉症児が抱くコミュニケーション問題の核心に迫ることはない。あくまでも愛着形成を基盤とした情動的コミュニケーションの成立を目指すこと、そのことが彼らの本来の言語認知的発達のみならず、社会的行動の獲得の上でも不可欠である。脳科学研究の最近の動向をみると、愛着欲求や動機づけの中心的役割を担っている扁桃体という大脳基底核の一部が、自閉症の共通の脳障害所見として注目されつつある（十一，2001）。その意味からも筆者の主張はあながち的はずれなものでもないように思われる。本稿で述べた治療戦略はけっして困難な課題ではないことも筆者は実感しつつある（小林，2001）。

6. 文 献

- Damasio, A. R. : *Descartes' error: Emotion, reason, and the human brain*. Avon Book, New York, 1994. 田中三彦（訳）：生存する脳—心と脳と身体の秘密—。講談社，東京，2000.
- 小林隆児：自閉症の発達精神病理と治療。岩崎学術出版社，東京，1999.
- 小林隆児：自閉症の関係障害臨床—母と子のあいだを治療する—。ミネルヴァ書房，京都，2000.
- 小林隆児：自閉症と行動障害—関係障害臨床からの接近—。岩崎学術出版社，東京，2001.
- 小林隆児：発達障害治療における愛着形成のもつ意味。乳幼児医学・心理学研究，印刷中.
- 小林隆児：自閉症とことばとあいだ—関係障害臨床からみた世界—。ミネルヴァ書房，京都，（執筆中）。
- 小林隆児・財部盛久：自閉症児の母親たち—母子治療からみた世代間伝達—。臨床精神医学，27(増刊号)；158-165，1998.
- 鯨岡 峻：初期母子関係における間主観性の領域。鯨岡 峻（編訳著）・鯨岡和子（訳）：母と子のあいだ。p.277-312，ミネルヴァ書房，京都，1989.
- 鯨岡 峻：原初的コミュニケーションの諸相。ミネルヴァ書房，京都，1997.
- Richer, J. M. : Human ethology and psychiatry. [van Praag (Ed.)], *Handbook of biological psychiatry*. Vol.1, p.163-193, Dekker, New York, 1979.
- Richer, J. M. : Avoidance behavior, attachment and motivational conflict. *Early Child*

Development and Care, 96; 7-18, 1993.

十一元三：発達障害と脳. *こころの科学*, 100; 78-87, 2001.

Williams, D. : *Nobody nowhere*. Times Books, New York, 1992. 河野万里子（訳）：自閉
症だったわたしへ. 東京, 新潮社, 1993.